

# 東京大空襲の思い出

●成田東三丁目

小林 裕子

(昭和八年生まれ)

私は昭和二〇年三月一〇日、東京大空襲の日、国民学校五年生で浅草区松葉町一三〇番地に住んでいました。そこはちょうど上野と浅草六区（映画館街）の中間にあり、そのころの学校は、集団疎開や縁故疎開で地方に散り散りになり、三クラスあった五学年が六分の一の残留組だけ毎日午前中の授業しかなく、それもあいている先生が担当しての勉強、それと机の下にもぐる避難訓練とかで満足な授業も受けられない日々でした。

九日の夜中の一時ごろだったと思いますがゆり起こされ、いつも枕元に用意してある大事な物（今は何を入れてあったか思い出せない）が入ったりリュックサックを背負い救急袋を肩から下げ防空頭巾をかぶり、急ぎたてられながら外へ出てその時家族ともはぐれてしまい、一人で表通りへ大勢の人々が歩いていく方向に私も歩き出しました。強制疎開道路（幅一〇〇メートルぐらいで長さは不明。上野あたりが基点で家を取りこわして出来た広い避難道路）につく。

夜空にはひっきりなしの低飛行のB29の爆音とともに無数の

焼夷弾が落とされまたたくまに火の海となり、そのうちに風も強まり一帯建物は火に包まれゴウゴウと音をたてて五メートル道路をへだてた家が燃え始め、その火が狂ったように渦を巻きながらゴウゴウと私の座わっている方に迫ってくる。

三月だということにとっても暑くなり、そのうち近くの五メートル四方の防火用水から見知らぬ親切なおじさんが水を汲み、頭の上からざあざあとかけてくれ、火の粉をふせいでくれた。真近で見た火の恐ろしさは今でも忘れられない。その家も焼け落ちたところ周りにどよめきが聞こえて来た。東の方を見ると観音様が屋根も柱も火に包まれ、骨組がおきのように真赤になって、最後の瞬間、音は聞こえないがドサツと崩れ落ちた。周囲からアーともオーともどよめきの声が聞こえて来た。明方六時ごろあたりが明るくなり始めたころ、B29の爆音も絶え気がつくあたり一面、焼野原でした。

ふと我に帰り、まず家に帰らなければと思ったが、どこを通りだか目標物が燃えてしまつてわからず立っていると、学校まで一緒にいきましようと思つて声をかけて下さる方がいて、つ

れていつて下さった。その道も歩くのも困難なほどまだ残り火の材木がころがり人二人が通るのがやっとで、そこを人々がゾロゾロとつながって歩いた。学校に来て見ると講堂は足の踏み場もないほどの混雑で皆疲れ切った顔をして座り込んでいた。朝食として一〇時ごろおむすびが一個配られ食べていたら、偶然にも遠縁の人が私の名を呼びながら捜しに来てくれた。家族も別の学校に避難していたので、一緒に親類の神田の家に身を寄せた。唯その時一八歳の兄の姿がどうしても見つからず、次の日も次の日も父は一週間も焼跡を捜して歩いたが、見つからなかった。

当日男は残って消火作業に従事することになっていたの  
で、兄は最後の最後まで家の近くにおいて海禅寺の納骨堂に避難した。そこは絶対安全と思われていた場所でも建物の周囲は立派なコンクリート造りで入口は電動シャッターがついていたが、屋根が木造の銅ぶきであったため焼夷弾を落とされ停電で入口も開かず逃げ場もなくそこで亡くなった。それは父がさがし出した時、体は完全に灰になり前日父からもらった焼けた腕時計があった。きつとうつぶせになって腕は胸の下に、それと印と茶色に変色したお金が遺品として残っていたので兄の死を知ったのでした。その名を美濃部清輝、一八歳の命でした。これを書き上げると昨夜の事のように思  
い起こされ胸がうずいて痛む。

最後にたくさんの犠牲者の御冥福をお祈りいたします。



修了証

右者昭和拾八年度第二國民兵軍事教育ヲ  
修了シタルコトヲ證ス

昭和十八年六月三日

帝國在郷軍人會東京支部長



佐久間孝

修了証

右者昭和拾七年度未召集兵軍事教育ヲ  
修了シタルコトヲ證ス

昭和拾七年六月貳壹日

帝國在郷軍人會東京支部長



佐久間孝

修了証

〈提供 佐久間愛子さん〉

# 女学生の頃に

●堀ノ内三丁目

小林 リヨ

(昭和二年生まれ)

戦時中のころの私は、戦争のない社会がこんなに平和で、自由な社会であるとは想像もつかなかった。

今はただ、あの悲しい経験を二度と繰返したくないと願う、一人の戦争体験者である。

昭和二年生まれの私が、北国の街の女学校に入學した。そのころは日々戦時下という生活が厳しさを増し、戦場第一主義に向かつて、国民の衣、食制限はますます強化の一途をたどり、統制されていった。銃後を守る愛国婦人会のたすきをかけた方々が、千人針を結んで慰問袋を作り、兵士を戦場へ送ると一人、二人と戦死者の数が増えて、やがて軍需工場や農作業等に、学生たちもかり出されるようになっていったのである。

戦争が急迫している時代の女学生といっても、名ばかりのようなもので、時間の多くは勤労奉仕の実施に挺身させられて、授業時間にも落ちつきが持てないのである。そして昭和一八年になると、学徒戦時動員確立要綱が閣議決定されると、学生たちはますます勤労奉仕が多くなった。

北国の女子学生である私たちは、農耕作業の手伝いや肥料補足のために、市内の馬糞ひろい等して、少しでも生産増強に繋<sup>つな</sup>がるように奉仕して、折々体育時間が作業に変更されていく。それが突然、川崎重工業地帯の軍事産業へ学徒動員ということになった。

もはやそのころの東京や川崎地帯は、米機の爆撃を受けていると報道されていた。上京準備に学校の寮から家へ帰ると、母は娘を戦場へ送る気持ちと同じだったに違いない。

「ナアー、爆弾に当たらないようなナアー」と、しみじみ言いながら、着替えにと、母の着物をほどいて作った、綿縞や綿緋りの国民服を私のこうりに詰めてくれた。旅立つ娘の無事を願う母の愛情が、私にも熱く伝わってくる。

昭和一六年の宣戦布告のあった後、私の兄も戦場に出ていた。母は毎日、近くのお宮に兄と、私の無事祈願に通っていたらしく、田舎にも敵機が来ると困るので、防空壕を作った等と、郷里の様子を知らせる手紙の入った小包を、川崎の寮に送ってくれてわかった。

小包を開くとスルメや干しいもが出て、それを友達と奪い合うように食べたことが、今も身近な思い出としてよみがえる。

学徒動員先では、飛行機の精密機械を組み立てる作業に従事しましたが、組み立てた機械に対する精度は厳しく求められ、不馴れな土地で、不馴れな作業で体調を悪くし、帰省する人も出てしまう。

毎日の食事は、コウリヤンの粘りのないポロポロのご飯と、サツマイモの葉の味噌汁に同じ葉のつくだ煮や、ほんの少しの小魚のつくだ煮等の、お粗末な食事は、記憶に消えない。

日がたつと、連日の敵機来襲のサイレンに馴れてきていた私たちが、ある三月の夜の警報に「またかあ」そう言いながら、寮に作られてある防空壕に退避した。しかし防空壕の中が明るく無気味な予感におののいていると、目前に地響きさせて落ちてくる時限爆弾に、身を振わせて、再び退避の声に外に飛び出し、ひたすら逃げたのである。

照明弾によって、夜の空は狂ったように明るい。ますます米機の数が増えて縦横にそして低空射撃発射で、動く人々を打ちまくり射殺し続ける敵機であった。

私たちは地域の地図もわからなく、ただ人の走る方に後を追って走っていった。着のみ着のまま、救急袋を下げて、泥だらけの重い防寒コートを着て、防空頭巾も焼け焦げている。また、私たちの逃げ迷う道端には、悲惨な死体がたくさんあった。助けを求めたいように動く人が目に入っても、私たちは

手を貸すゆとりもなく、安全地域を探すのに、精一杯だったのである。

爆撃の間をくぐり、逃げ回って朝になっていた。ようやく点呼が始まると、一人の犠牲者に誰も口を開くことなく、皆沈み悲しんだ。

運命を分けた、あんなにこわい体験の後である。しかも級友を失ったショックも大きい。

昨夜の敵機は川崎重工業地帯が目標の、爆撃だったという報道が入ると、渡された一つのおにぎりを手にしながら、泥だらけの姿で私たちは、しゃくりあげて泣いた。

被災者になって数日後、川崎で受けた傷を背負った私たちは、泥つきのコートを着たまま北上する汽車の中にいる。

郷里が近付いて来る……。絶望感で重い気持ちも、少しずつやわらぎ、無言だったお互いが言葉を交わすようになっていく。

久々に校門をくぐった。学校寮には風呂も用意されて、歓迎の御馳走も私たちを待っていた。あの時の旬の焼きニシンの味と味噌汁、そして野菜の煮物、なじみの味なのに、格別おいしく思ったものである。その後数日間の休日在家に帰ると仏壇に線香がともされて香りが漂っている。母がそばにきて、「川崎が全滅と聞いたからナア」と笑いながら私の元気を喜んでくれた。

# 大空襲の東京に残留して

●成田東一丁目

阪田 登茂子

(大正一〇年生まれ)

昭和二〇年五月二五、六日大空襲で火の海となった東京は三日三晩燃え続け、二八日の夜半になって燃えるものが尽きてようやく鎮火した。といっても新宿、四谷あたりでは至る所、へし折れたガス管から噴出するガスは止めようもなく、青く激しく燃えあがる炎の長さは一メートルにも達する程で、なお燃え続けていた。

一方、中央線は、荻窪以西折り返し運転となり、東京駅までの運行は不能に陥っていた。その復旧の兆しが見え出したのは二九日の朝の事で、荻窪からは二駅先の高円寺まで行けるようになったとラジオが伝えた。私は嬉しくて、まるで全線が復旧したかのように喜んでしまった。

下宿のおばさんは、空襲直後へなど、娘さんが行くものではない、と言って止めた。おばさんは、焼死体がゴロゴロしている惨状を見せたくない、と思ったようだったが、口に出しては言わなかった。私は、職場がどうなっているか見たいと言った。私の職場のS電工株式会社本社タイプ室は、三日三晩燃え続けた火の海の中の京橋区(現中央区)宝町Aビル

四階にあるのだ。

バックだね、東京駅までは一六駅もあるんだよ。たった一駅先の高円寺まで行っちゃって、その先をどうするの、行けっこないじゃないか、とおばさん。そうかも知れないけど、行ける所まででもいいの、行って見たいんです、と私。おばさんはあきれていたが、それならば、ちょっと待ちなさい！と急いで弁当を作ってくれて、くれぐれも気をつけるんだよ、無理しないで引返しておいでよ、と私の背中をたたいて送り出してくれた。

阿佐谷の中央線際の住宅地や駅周辺の焼け跡には、焼失家屋の無残に焼け爛れて崩れた残骸の、黒い焼けぼっくいが散乱していた。駅も線路をまたぐ橋梁を残しただけとなって、改札口も無くなっていた。プラットホームにゆっくりと入って来た五両連結の電車には、一つの車両に一人か二人の中年男が乗っていた。

高円寺の焼け跡は阿佐谷より遙かに広がった。降りようと腰を浮かせた私を、窓の外から覗くようにして駅員は言った。

「この電車は、中野まで行けるようになりましたから」

中野は広大な焼け野原の中にあつた。プラットホームに降りた時、私はその現状が信じられずに、ええっ！これが中野駅？と叫んでいた。何も無くなつた階段を降りた所にも、何も無く、駅前広場と思われる手前側と向こう側に、一人ずつ中年男が所在なさそうに立っていた。彼らの足元には、バス停の標識立て跡と見られる小さな四角い穴のあいたコンクリート塊がころがっていたが、バスが来そうな気配は全く見られない。私は、青梅街道方向の南を指して歩き出した。その界限の焼け跡には、焼けぼっくいはおろか灰さえ嘗め尽くされたように無くなっている事に、私は気付いていた。五叉路の角々に、二、三人から五、六人ばかりの中年男たちが立っていた。

聞いてみると、トラックが来るので待っている、という。向う角の男たちの中に、一人だけ、私と同じ二四、五歳ぐらいの女性がいて、俯いて憂い顔で立っていた。ふと、この場の雰囲気が悪化になっているのを私は感じた。険しい表情になつた男たちの視線の先を見ると、五叉路の真ん中に二人の若い陸軍将校が立っていた。周囲の忿怒の眼差は軍人に向けられている。小石があつたらぶつけかねないような険悪な雰囲気だつた。こんなになつたのは、やつらのせいなんだ！と誰かが捨て台詞めいた言い方で言う。次の瞬間、北北西側から一台のトラックが驀進して来て、二人の軍人が素早く対応して停車させた。それから彼らは周囲に向かって叫んだ。

「この車は、日劇前まで行くそうですから！」

私は、ここにいる人たちのおおかたは乗るのではないかと思いながら、トラック目掛けて走つた。走りながら考えていた。私は日劇前まで行つたら、歩いて銀座から三原橋まで行き、昭和通りに出て八重洲通り方向を指して行けばよいのだ。帰りが、鼻を撮まれてもわからない程の漆黒の闇の青梅街道を歩く事になろうとは、この時は思い至らなかつた。

トラックに乗り込んだのは、意外に少なく、軍人の他に男が四人と私ともう一人の女性と、合わせて八人だつた。軍人は運転席の屋根に掴まって立ち、私ともう一人の女性は後部のへりに掴まってうずくまって乗り、男たちは二人ずつ別れて左右のへりに腰掛けて乗つた。

車が動き出して、五叉路で待ち続けていた人々の立ち姿が遠のき、だんだん小さくなって行く。鍋屋横町にさしかかつた時、あれは焼死体じゃないか！そうだ、あれもそうだ！と男たちが叫んだ。私はとつさに目をつむり、ガバと身体を丸めてしまつていた。「娘さん！焼死体はもう見えなくなりましたよ」と言われるまで顔をあげる事が出来なかつた。なお、このような時、硫黄島を飛び立ったB29大編隊が横浜爆撃を指して北進していったのだつた。

# 若人に伝えたい私の戦争体験

●阿佐谷北三丁目  
佐藤 利枝子

(昭和八年生まれ)

私の両親は、昭和四年に現在の阿佐谷に引越してまいりました。その当時は家もほとんどなく、家から駅まで一望に見渡せたとのこと、のどかな田園風景だったにちがいありません。

私は昭和八年、この地に生をうけ、小学校に入るまでは何の事もなく生きていたように思います。幼少にて二・二六事件というのも知らずに小学校へ入学した次第です。

そうして小学校二年、昭和一六年一二月に太平洋戦争が始まり、わけもわからぬままにさわぎが大きくなるやらで一日と戦争がはげしくなり、学童疎開、縁故疎開といっはさわぐ有様。私たちの仲間が長野のお寺に落ち着いたとのことでしたが、親元から離れて随分みじめで、食べるものも思うようにゆかず、育ち盛りを過ごしていたそうで、今では全くという位考えられない程です。

また、学童疎開や縁故疎開をしない子供たちは、班長を先頭にグループにわかれて登校する状態で、服装も防空頭巾ともんぺ姿といった格好で、これも今では想像も出来ない哀れ

なことでした。

登校途中で、警戒警報や空襲警報のサイレンとともに班長に連れだつて家へ戻り、防空壕で待避する事しばしばで、授業もろくろく出来ず勉強とはほど遠い日々かりを過ぎ、いつも気持ちは安定せず遊ぶことすら出来ない日々でした。

時折り敵機が頭上をかすめて通る爆音には、身の細る思いでした。

食べるものといえば栄養のとれるものは望めず、お米の中にはほとんど大豆飯、麦飯といったもの、また、さつまいもの粉で作ったパン、おじやの中にニラを入れても好ききらいはいっはいられず、小麦粉のすいとん、とうもろこしの粉をねってフライパンでやいたもの、これらのものをくり返して生きながらえ、よくも栄養失調にもならず弱い体を支えてきました。

三年生時分と思いますが、担任のK先生に召集令状の赤紙がきて出征され、小旗をもって送りにいった事が今でも思い出されます。



私は疎開もせずに、現在の家で勝利の事ばかり祈り「欲しがりません勝つまでは」とポスター画を置いてあちらこちらの電柱にはつてがんばった事もしばしばでした。

また、夜間には電灯も満足にともせず、いつも黒い布をかぶせて東部軍情報というラジオの放送を聞くたびに恐ろしさにおびえ、寝る時には枕元に衣類、防空頭巾、食糧、救急袋、水筒等を持って、いざかまくらという時には暗闇でも逃げだせるようにと訓練し、私どもも軍隊式で毎日を通しました。

一日として警戒警報、空襲警報のサイレンの音を聞かない日はない位でした。敵機は茨城県あたりから編隊を作り、それはもの凄いい数のようで、いつもきまったコースで本土に飛来していたようでした。

その当時、私は戦争のまっただ中に盲腸を煩い入院していた時、いざという時には母がおぶって逃げるという困難な情勢で、夜には照明弾がぼかぼかと浮いている事もあり、気持ちの悪い有様で夜もろくろく休めない状態でした。

昼間といえば空襲警報の時には高射砲の凄まじい音、あたり黒煙の花火といった感じで編隊を作って通りぬけ、大砲の音が激しくなると飛行機にあたり、ある時は空中分解するようになりめらめらと火と黒い煙を吐きながら、落下する有様は恐ろしいものでした。またB 29が焼夷弾をばらばらと落とすように有様は、いかにも頭上に落ちてくるような錯覚になり、震える思いがしました。

ある時、私の家の天井をつきぬけて大砲の弾丸のぬけがら

と思われるものが落ちてきて恐ろしくさわれぬまま隣のお兄さんにみてもらった場面もありました。

また、私が庭先で敵機の通過に気をとられていた矢先に機銃掃射にあい、急いで土足のまま家の中に飛びこんで銃筒の陰にかくれたこともあり、もう少しおそれれば撃たれていたに違いありません。本当に命拾いをした次第で、今思えばこれこそ身の毛が立ちます。

戦争は丸三年過ぎても一向に終わる様子もなく、東京の下町も三月一〇日のあけ方、家から東の空をみれば夕やけ空のように真赤に染まり、凄まじさを物語るようでした。先日も映画でみましたが、あの通りのものすごさだったと思います。私は直面しておりませんが、何ともいいようのない悲惨なものでしたでしょう。

また、山の手方面もその後近くまで焼けてきましたので、母につれそって私一人田舎へ疎開することになりました。田舎は静かで時折川の流れの音が聞こえる中で、戦争中とは思えず何もないかのように感じられるあたりの状況、白米食、煎餅と今まで味わえない美味しいものでした。

しかし親から離れたことのない私は、学校も遠くいじめもあると聞き、学校へは行かず、家族のことが気がかりとなり、山の中での生活は都会のものにとっては寂しく、大豆の御飯でもよいからと、二〇日程ただけで東京へ帰ってきた次第です。

そうこうしているうちに昭和二〇年八月一五日、戦争も終



わり天皇陛下の終戦の詔勅しよくちよくが放送され、皆共々うな垂れて涙をのみながら聞き入りました。

東京、広島、長崎などが焼け野原と化してしまい、あの戦い続けた中に虚しさが残りますが、召集を余儀なくされ特攻隊で出陣した若き兵士たちのことを思うと、辛かったらうと胸の痛い思いがし、心から冥福を祈る気持ちで一杯になります。

当時子供心に「武運長久」を祈り「千人針」等ということをかされたものです。そうして昭和二二年三月に無事卒業しもんべ姿の写真をみるにつけ、戦争の生々しさを感じます。

敗戦とともに人口は減り、一変して物資も恵まれない時代となりました。しかし物質的に恵まれ始めると精神的に世の中が変わり人情はうすれ、この戦争体験を若人にも伝えたいと思います。体験者すら身勝手きわまりない昨今、しみじみと寂しさを感じます。

戦争当時の物のない時皆でわけ合ったという気持ちがあるがうすれ、侘びしい一人よがりの世の中になりつつある現在、お互い同士手をとりあって暖かみのある社会を建てなおしていきたいものと、切に願わずにはいられません。

今後とも老いも若きも、暮らしよく平和で人情あふれる社会生活に近づけるように、心から協力を念じて止まない次第です。



